播磨町制40周年記念　特別展

郷土が生んだ近代美術の旗手

浅原清隆展

十月二十六日(土)～十二月八日(日)

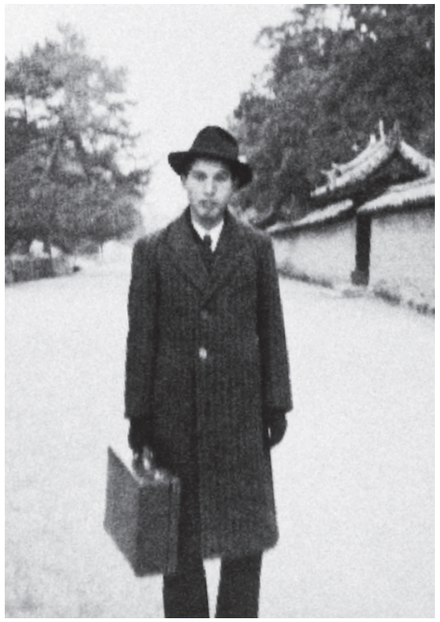
主催　播磨町　会場　播磨町郷土資料館

町制40周年
スタンプラリー対象

播磨町では、大中出身で日本近代美術の歴史のひとつのページに足跡を残された浅原清隆氏の業績を展示します。

展示は大きく五つに分けて行います。一つ目は、近代美術の中でも、シュールレアリスム（注1）の旗手として、活躍した様子を語るセクションです。二つ目は、ひとりの画家として、さまざまなモチーフを描いているセクションです。三つ目は、身近な人に心を込めて捧げた作品のセクションです。四つ目は、転機となった一九四三年以降の作品のセクションです。五つ目は、作者の絵画への真摯な態度が伺える、精緻な筆遣いで描かれた習作のセクションです。

▲美枝子夫人像



▲浅原清隆氏

住　所　播磨町大中396－1
休館日　毎週月曜日、月曜日が休日の場合はその翌日
開館時間　午前10時～午後5時
入場料　無料
問い合わせ　郷土資料館　☎0794(35)5000
http://homepage2. nifty.com /h-oonaka/

▲淡路島

▲絵手紙

▲祖父

【作品の特徴】

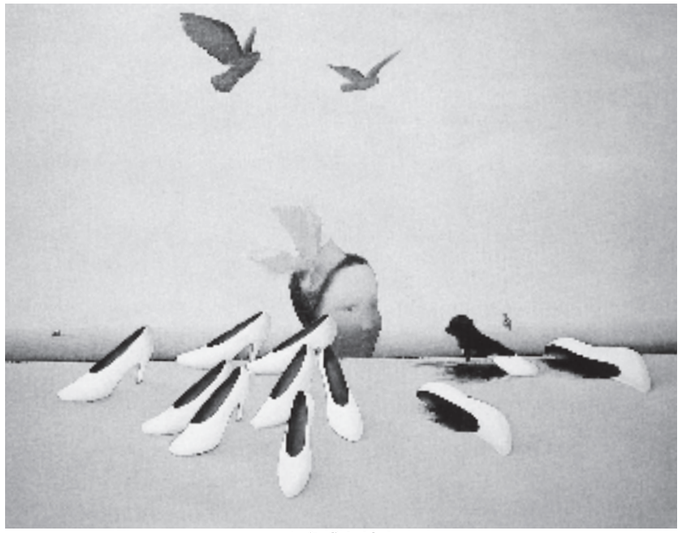
日本のシュールレアリスムの先駆者として、日本近代美術史に名を留めることになる作品は、作者の内面の確かさを示すように、どれも動きの少ない穏やかな内容です。地平線や水平線の向こうに、迫り来る戦争への思いではなく、その後の平和を見つめていた感がします。

また、ひとりの画家として描いたどの作品を見ても色に濁りがなく丁寧な筆遣いがみられます。これも、作品の「透明な詩的抒情性」を醸しだす要素となっています。

構図は、まわりの空間をやや広くとったものが多く、取り囲む空気を大切にしていたことがわかります。

（注1）
シュールレアリスムは超現実主義ともいわれる現実にはない人間の心に映る光景を描き、人の潜在意識を表現する。

第一次世界大戦後ヨーロッパで起こり、一九二五年、パリで展覧会が開かれる。ミロ、ピカソなどが出品する。日本では一九三〇年後半に高まる。



▲多感な地上

浅原清隆氏の足跡を見てみよう

【浅原清隆氏の経歴】

一九一五年　浅原清治郎家の九人兄弟の長男として生まれる。

一九二八年　阿閉（あえ）村立尋常小学校を卒業。県立加古川中学校（現加古川東高等学校）に入学し、美術クラブに入る。工藤正義先生の影響を受け、小磯良平氏に師事。

一九三四年　帝国美術学校（現武蔵野美術大学）に入学。シュールレアリスムの影響を受ける。

一九三五年　第二十二回二科展に「敗北」が入選。その後グループ「表現」を結成し、積極的に芸術運動を展開する。

一九三九年　七月、神戸で個展を開く。八月からの台湾旅行で、やがて妻となる青木美枝子氏と出会う。応召により、中国へ。

一九四二年　除隊。青木美枝子氏と結婚。

▲1943年　見送りの車中にて

一九四三年　再びの応召。結婚から応召の六十六日間にさまざまな作品を描く。絵手紙を戦地から送る。

一九四五年　ビルマ戦線で行方不明となる。